

「教皇ヨハネ・パウロ二世」

主任司祭 晴佐久昌英

ヨハネ・パウロ二世の訃報を、ぼくはスペインのバレンシアという港町のホテルで見ていた夜のテレビニュースで知った。以後、全テレビ局はバチカンのライブ映像を流し続けた。サンピエトロ広場に集まった数万人の信者が聖母贊歌「サルベレジナ」を歌い出した時は、思わずぼくも起立して一緒に歌い、やがて群衆の間から盛大な拍手が起こった時は、ぼくもまた拍手しながら、教皇と同じヨーロッパ時間に居合わせたことを感謝した。拍手はいつまでも途切れることなく、涙をこぼしながら微笑んで手を打ち続ける人々の映像に、胸が熱くなった。

ぼくはヨハネ・パウロ二世に7回会っている。訪日ミサで侍者をした時と、バチカンの謁見ホールで3回、ワールド・ユース・デイで3回。一度は握手して、ひと言交わしたこともある。この教皇を、ぼくは心から敬愛していた。理由はいくらでも並べられるが、「イエス・キリストの香りがする人だから」のひと言で十分だろう。保守的すぎる、長すぎるなど色々言われることもあったが、の方のうちには間違いない、キリストが生きていた。争いあう愚かな人類を救うために命をかけた、キリストが。

教皇の葬儀ミサの前日に日本へ帰る予定だったが、旅行会社に無理を言ってチケットを取ってもらい、ローマに向かった。満席の飛行機で隣り合わせたご婦人は、ぼくがホテルの予約を取れている事をしきりにうらやましがった。泊まるあてはないが、とにかくパパ様のところに行きたいと言う。でもそれは、ぼくだって同じだ。行っても仕方ないことはわかっていたし、事実、着いてみたらすでにバチカンはクローズで、百万単位の人々が取り囲んでいた。ただぼくは、行きたかったのである。パパ様の近くに。すなわち、イエスさまの近くに。

驚いたことに、集まってきた人々の大半は青年だった。「パパ」はいつも青年達に自分のもとに集まるよう呼びかけていたし、彼らは信頼と尊敬を持ってその呼びかけに答えてきた。イエスは使徒たちを「そばに置くため」「宣教させるため」に選んだと、聖書にある。何千人の「パパの子たち」が、これから宣教を開始する。